公立小学校　教頭　52 歳

作1「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名　遠藤　隆宏

震災の日。私は県北地区のある小学校に教頭として勤めていました。卒業を間近にした6年生の子どもたちが教室に先生方を招いて「感謝の会」を開いてくれていました。

歌を歌ったりゲームをしたりして楽しく過ごしている中で、あの地震が起こりました。今まで経験したことがない大きな揺れの中、机は廊下に出されていたので隠れる場所がない子どもたちは、床に這いながら悲鳴をあげ震えていました。私は通路を確保し、避難のタイミングを図っていましたが、揺れが長く続き、その機会がつかめずにいました。

校舎が崩れ落ちそうな大きな揺れの中、ふと見ると、その場にいた先生方は誰の指示でもなく、みな、子どもの上に覆いかぶさり、「大丈夫、大丈夫」と声をかけていました。

幸いその後、全員が校庭に避難することができましたが、命がけで子どもを守ろうとしたあの時の先生方のその姿は、3年経った今でも鮮明に覚えています。

（20文字 × 20行）

No.2

匿名希望

02 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名

大震災の時は、こんなに強い地震は初めて
と思うぐらいこわいものでした。

地震は家の中でおこりました。激しい揺れ
と地ひびきがしてこわかったです。子供が小
さかったので家の中のことは父と母にまかせ
て車の中に逃げました。

地震は長かったです。外は吹雪になってき
ました。寒かったです。

しばらくすると地震はおさまり、家の中に
入りました。ひがいはそんなにひどくはあり
ませんでした。

電気もガスも大丈夫でした。ひと安心しま
した。

次にこわい思いをしたのは、放射線です。
最初のころは子供たちをあそばせることがで
きなかったです。かわいそうでした。

こんな地震が来た時の準備などをしておく
ことが大切だと思いました。

(20文字×20行)

No.3 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 氏家　和美

私達は東日本大震災を経験しました。震災後私達福島県民は、放射能について問題視され、辛い思いをたくさんしました。でもそんな中、学校で出る手作りの配給食が、とてもありがたかったです。配給食はいつも同じでしたが温かく、私達のために一生懸命作ってくれたことが嬉しかったです。その後たくさんの支援物資やメッセージを頂き、とても心に染みました。今や震災以前のような暮らしができています。震災を通して人の温かみや、感謝の気持ちを改めて学びました。

今後私達は、感謝の気持ちを忘れずに世界中の人に、日本の復興を伝えていくべきだと思います。まず1人ひとりができることから始めていき、震災以前よりも活気に満ち溢れている東日本にすることが、復興への第一歩だと思います。また、一生懸命になれるものを見つけ出すことにより、東日本大震災をもっと乗り越えていけると思います。

（20文字 × 20行）

会津若松市立城南小学校　11 歳

114 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 半澤 楓

3年前の3月11日私は、いつものように楽しく終わった学校からお兄ちゃんと帰ってきてこたつに入っていたとき、いきなりものすごい音と同時に横ゆれに地しんがきた。私は、今まで経験したことのないゆれにパニックになりながらも、こたつから飛び出し、かんかんへ向かった。しかし、目の前ですいそうが落下し、でることができなかった。私は急いでリビングのまどからでた。向かいの家の人の元へ行き、ひなんした。

あれから引っこして、今はちがう場所にいる。しかし、この場所も地しんのえいきょうで、道路に地われが入り、原発事故のえいきょうでほうしゃ線もある。今思うと、地しんよりおそるしかったのは、津波、原発事故の二次災害だった。

これからは、ほうしゃ線、津波のひがいでひなん生活を送り、苦しんでいる人々のためにも国、世界がつながり、今できることに精一杯力をつくし、助けてあげるべきだと思う。

(20文字 × 20行)

公務員（福島県職員） 37 歳

5 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名　長尾　智則

当時私は南会津町から出張で、福島市内のふくしま中町会館５階で研修会に参加していた。今体験を断片的に思い出すと…避難時階段の壁の亀裂と剥がれた塗装、信号が全て消えそれでも暴走することなくゆっくり進む車の群れ、土湯峠にできた大きな亀裂と断層を乗り越え、峠を越えた時にすれ違った消防車のサイレン、早々と店を閉めていく会津若松市内の店々、唯一開いていた幸楽苑で食べた１杯のラーメンと水、ようやく帰宅し無事を確認しあえた妻と子、放射線の問題もあり店から水が消え、物流が途絶えたことから粉ミルクとおむつが中々手に入らず実家の郡山から宅急便で送ってもらったり、あいづ総合体育館の避難所へ泊まりで支援に行った事（京都のチーム方々、お世話になりました）を、おぼろげながら思い出した。当事者であっても過ぎていく日々に追われ風化していく記憶は、何らかの形で遺し、亡くなった方の足跡きてきた方の記録を留めて往くべきだと今回

（20文字 × 20行）

5 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名　長尾　智則

改めて感じた。

（20文字 × 20行）

南相馬市立石神中学校　14 歳

6　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　　氏名 伊賀 拓実

私はあの日、学校の教室で授業をしていました。すると地面が上下左右に大きく揺れて何が起きたのかわかりませんでした。

国内史上最大のM九・〇地震でした。その後、東北地方太平洋沿岸に大津波が襲来しました。その時、私は仙台にいました。

その後、震度が下がり海から近くにいた人々は、すぐに高台へ避難しました。その人々は、数時間後に自宅へ帰宅しました。

その後、通信は復旧し、数日後に自宅へ帰宅しました。

地震発生直後、電気が消えてしまいました。

東日本大震災から三年と九ヶ月経ち、復興は着実に進んでいます。仮設住宅に住んでいる人々に対しても自治体や政府は、

しっかりと対応していきます。私は、被災者の方々の心のケアを行っていきたいです。

匿名希望

7 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名

あの悪夢の日がもうすぐ4年が過ぎようとしている。

小学1年生だった娘も、来春から6年生。実家は、小名浜魚市場の目の前で食堂を営んでした。

客層は市場の競り買い人や船工場の人々などが主で、早朝6時から開店し昼食時間を過ぎた午後3時頃に閉店する、そんな店だった。

あの日も普段と変わらぬ一日が過ぎていく予定だった。

しかし、今までに感じたことのない激しい揺れが津波を引き起こした。

店は、津波にのまれた。

現在は更地となり店は、廃業を余儀なくされた。

理由は、原発事故による漁業の再開が見込めなかったことによる影響である。

魚をとって水揚げする人がいなければ、店は始まらない。

（20文字 × 20行）

匿名希望

7 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名

私たちは、地元で水揚げされた新鮮な魚を食べて育った。

現在も、汚染水問題など食への心配がまだまだ解消されていないと感じる。

どうか、安心で安全な地元の魚が食べれることを願う。

（20文字 × 20行）

学生(東京農業大学 3年) 22 歳

8 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 高木 保成

2011年3月11日。高校3年生だった私は高校の進路相談室で、翌日に控えていた大学入試の勉強をしていました。問題を解いていた時にいきなり緊急地震速報が鳴りはじめて教室が揺れ始めました。机の前には私の身長よりも高い問題集の入った本棚が今にも倒れそうなくらいに揺れていました。揺れが収まり教室を出た時、廊下は水道管が割れて水浸しで舞い上がった埃で真っ白でした。そしてヒビだらけの駐輪場アスファルトを見た時、とんでもない地震であったことを再認識しました。

私は大学で農業の勉強をしており、将来は福島に戻り福島県の農業の復興の手助けをしたいと考えています。福島の農作物は未だに風評が続いていますが米や果物、日本酒など日本だけでなく世界に誇れる品質の物が沢山有り、それを生み出せる土地と技術があるのです。

震災から4年経ちました。福島の農業の可能

(20文字 × 20行)

8 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 高木 保成

性は無限大にあると考えています。農家のみなさん、一緒にがんばりましょう。

(20文字 × 20行)

09 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿 氏名 遠藤 舞

「この季節に、雪？」

友達と歩きながら、不思議に思った。その日は、コートもいらないほど暖かかったからだ。雪は風にふかれふぶきとなった。そのとき、ゴゴゴゴゴ、低い音がして、地面が左右上下に動き始めた。近くの車は波にゆられる船のよう。バスケットゴールの柱は今にも折れそうだった。友達とフェンスにつかまり、「助けてください。」とさけんだ。必死だった。近くの家にひなんした。何人かで集まって、タオルをかぶって、しりとりなどをした。それでも、不安は消えなかった。寒さと不安でふるえが止まらなかった。家に帰ってからも、いつもとちがった。CDラックからCDがとび出し、タンスがたおれていた。外でも遊べなくなり、友達とも会えなかった。

今は外で遊べる。ようやく普通になった。まだ普通ではないものもある。復興は進んでいる。しかし、まだまだである。しんさい前と、何もかも違っているのだ。

（20文字 × 20行）

地方公務員　57 歳

10

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 森田隆二

福島県の目指すべき誇りに思う未来

1　再生可能エネルギーと水素社会の実現

福島県は、再生可能エネルギーと結びつけた水素活用社会の実現による、世界№1のエネルギー活用モデル地域を目指すべきである。

理由は、

①究極のエコエネルギーとして、水素活用の実用化が開始された。（自動車等）

②再生可能エネルギーの貯蔵と供給を、水素エネルギーに転換して活用することが未来のエネルギー政策になると考えられる。

2　1000万本の三春（桜、桃、梅）プロジェクトの実行

福島県は、国内外にPRできる目玉となる観光資源を創出することが必要である。

①1000万本の桜、桃、梅を10年間かけ県内各地に植栽し、花見山のような美しい景観を創出する。

②全市町村、県民、県出身者（ふるさと納税制度活用）の一体的協働ができる。

（20文字 × 20行）

11 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名　匿名希望

私は、平成23年3月11日の東日本大震災の時、私は、小学6年生でした。あの日私は、小学校の卒業式の練習後あっての大震災でした。私は、心の中で、もっっの曲はおわりだなと思いました。私は、復興の想いは、早くこうと に帰りたい気持ちです。ここまで。又、大震災の作所は、とても恐怖で泣いてしまいました。原発の爆発、放射能、みんなは、はなれなくなれです。私は、早くこうと の解決、みんなどおっしゃ 物を早く食べたいと思、ここまで。あの日の3月11日の大震災は、忘れられないとても恐怖だ、だと思います。あれから大震災から約4年ですが、私の想いは、復興が本当だです。私の小学校から卒業もず、と母ここまでした。建物や家などの様々な住宅、又人が復興でいやな気持ちになだ、だと思うあ。私達、そして早くこうと の人に気にたこ、ごうと の過様と話もあるっと も聞いてあす。私は、復興の想いは、こうと に願って家族皆で過ごしたいと思ここまで。

（20文字 × 20行）

12 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 伊藤 凜

「ありがとうございます」この言葉を言ったときのことは今も鮮明に思い出される。東日本大震災。多くの犠牲者と心に傷を負った人々がいた。僕は自分に何ができるか考えた。その時偶然見つけた新聞記事。募金について書かれていた。そこで僕は、募金を行い、新聞社か赤十字に持っていこうと考えた。友達と協力して募金を行うことになった。募金には多くの人が協力してくれた。しばらくしてある家族がやって来た。その家族が乗っていた車はいわきナンバー。母は、「この家族からは募金をもらわないようにしよう」と言った。その通りだと思った。被害の大きい地区の人を救うための募金なのに、被害の大きい地区の人から募金をもらうなんてもってのほかだ。ところが、その家族は、快く募金をしてくれたのである。思いかけない行為に驚きをまどいつつ、僕たちは「ありがとうございます」と言った。この体験で、僕は人の心の本当の温かさを知った。

（20文字 × 20行）

13 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿 氏名 三木 聡

私は、原発事故前も事故後も椎茸栽培を中心に営農し、それぞれ収入を得、また、人生設計を建て生活をしていた。

あの、原発事故さえなければ、豊かな自然環境の自然環境の恵みをいかし「安心・安全な椎の恵みを消費者に届けられた」事と思うと「原発事故を最小限にとどめる努力」を怠った東京電力や日本政府に怒りを向けるのは当然である。

今までは、福島県内の原木を中心に栽培していたが、現在は、県外のNDの原木を購入して栽培を続けている。汚染されたビニールや遮光幕の張り替えや農地の除染などを行った費用を東京電力に請求をしていますが、すべて、却下されつづけている現状である。

原発事故前の「安心・安全な栽培」を取りもどす事は、何十年掛るかは、想造もできないが、あきらめずにこれからも努力し、東京電力や国の責任を追求して行きたいと考えています。

(20文字 × 20行)

白河市立大信中学校　15 歳

14 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 鈴木彩加

激しく揺れる大地、襲いかかる津波。あの日、たくさんの尊い命が奪われた事を、私は決して忘れません。

私は当時、小学五年生でした。卒業式の準備のために、体育館で活動していた最中に地震がやってきました。教頭先生の、「逃げろ！」という、大きな声が聞こえた瞬間に、揺れが襲ってきました。下級生が泣く声があちこちから聞こえ、とても不安になった事を、今でも覚えています。

この震災により、多くの命が奪われ、多くの人が傷つきました。身体だけでなく、心にも大きな傷を負った人達がたくさんいます。しかし、全国の人々からの支えにより、一歩ずつ、また歩み始める事ができました。震災で失ったものは、なかなか戻らないけれど、「未来」への可能性はまだまだたくさんあります。支えてくれる人達に報いるためにも、感謝の気持ちを持って、皆で頑張りたいです。

（20 文字 × 20 行）

15 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 内山 亜実

私は小学五年生の時に被災しました。その当時は自分の置かれている状況を深く考えてはいませんでした。地震が起きて津波が来てたくさんの人が亡くなり、今まで聞いたことのない原子力、放射線、セシウムなどという言葉が飛び交い、両親からもその話題が多く聞かれるようになりました。

中学三年生となった今、放射線教室や新聞やテレビで放射線について学び、今後どうするべきか考えるようになりました。私は二度と原子力の事故が起きないように、また原子力について福島県を中心として研究が進んでいけば良いのではないかと考えました。エネルギー資源の貧しい日本にとって原子力発電は必要で研究をしていくべきだからです。

唯一の被爆地として広島、長崎は世界に平和を伝えています。私達福島県も原発事故の教訓を後世に伝え、科学の進歩に協力する使命があると思います。そのことが福島の復興に必ずつながると思います。

（20文字 × 20行）

16 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 金沢 奈月

私は、小学校五年生の時に、東日本大震災を経験しました。

いつもどおり帰りの準備をしている時、立っていることができないくらいの大きな地震が来ました。急いで校舎から逃げ出し、校庭へ避難しました。地面は割れていて、校舎にはひびが入っていました。その光景を見て、私はとても恐ろしくなりました。家の人は地震でけがなどしていないか、親は学校に迎えに来てくれるのだろうかなど、とても落ちついてはいられませんでした。しばらくして、親が迎えに来てくれた時は、安心して泣いてしまいました。

今もあの時の光景は忘れていません。現在地域の人たちが助け合い、そして日本中の人の励ましのおかげで、もとの姿に戻っています。私はあの時経験した地震をとおして、人と人の助け合いの大切さを知ることができました。今、生きているということ、支えてくれる人がいることに感謝したいです。

（20 文字 × 20 行）

17　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 高久愛弥

二〇一一年三月十一日に起きた「東日本大震災」。その震災が起きてから、原子炉が爆発しました。放射能の影響は今でも続いてる状況です。今まで体験したこともなかった大災害に対して私は、「恐怖」を覚えました。多くの人々が亡くなり、家は地震で破壊され、津波で流され、大きな損害を出しました。当時五年生だった私は、「どうしてこんな目にあわなきゃいけないの？」と何度も思っていました。

私は今、中学三年生です。ふと震災のことを振り返ってみると、自然の畏怖を感じます。災害が起きることは、自然の法則なのです。災害は起きても仕方がありません。しかし仕方がないからといって何もしないわけでは、ありません。災害への対策をとり、東日本大震災のように多くの命が無くならないようにしていくことが大切です。そして、一日一日を大切にしてはきていくことが私の願いです。

（20 文字 × 20 行）

白河市立大信中学校　15 歳

18 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 金子稜葉

私は、東日本大震災による大きな被害は、あまりありませんでした。しかし、福島第一原子力発電所の事故で被害をうけました。高い線量の放射能をあびてしまったのです。

現在、汚染ごみの処理や土壌汚染を行っていることもあり、放射能が下がってきています。東日本大震災が起こる前の福島に、だんだん戻りつつあると思います。しかし、汚染ごみをどこに処理するかなど、様々な問題が起きています。この問題を早急に解決しなければ、福島の復興は程遠いと思います。

私たちは、これから何十年もの間「放射線」と向き合っていかなければなりません。広島や長崎にも、被害の大きさは違いますが、同じ現状がありました。広島や長崎は、逃げずに向き合うことで復興しました。福島も、広島や長崎のように、今、起きていることから逃げずに向き合う必要があるのです。福島を活気あふれる未来にしたいです。

（20 文字 × 20 行）

白河市立大信中学校　15 歳

19 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 十文字 涼

私達は3年9ヶ月前のあの日、東日本大震災を体験しました。

揺れ始めた時は何がおきたのか全く分かりませんでした。地震体験車でしか体験した事がないようなくらいの強い揺れがおこり周りからは泣き声が聞こえました。家に帰ると玄関が浮いていて、家の内は散らかっていてとても入れる状態ではありませんでした。外へ出たくても原発問題で外へ出ることができずまさに生き地獄でした。

そんな出来事からも時が立ち、大震災前と同じとまでは言いませんがそれに近い暮らしをしている人々は多いと思います。ですがまだ辛い生活をしている人もたくさんいると思います。そんな人達のことを考えている人はどのくらいいるでしょうか。少なくとも全員ではないと思います。それでいいのでしょうか。私はだめだと思います。福島県民、いや、日本人みんなで手をとり合い前よりも強い日本をつくる。それが本当の復興だと思います。

（20文字 × 20行）

20「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 大川原恭佑

3月11日、東日本大震災がありました。僕は小学五年生でした。そしてその時は一つ上である先輩達の卒業式の準備をしていました。僕は先生に皆でパイプイスを運ぶよう言われました。そこで僕はパイプイスのある多目的ポールで皆にイスを配っていました。その時に地震がありました。僕の近くには一つ下の後輩が二人いました。僕達はすぐ机の下に隠れました。後輩の内一人は、「こわいよ、こわいよ。俺ここで死ぬの？」と言って、もう一人は口があいたまま、表情一つ動かさず黙りこんでいました。僕は咄嗟に「大丈夫だ。死ぬはずがない」と言いました。そして短いようで長かった地震が止まり、先生に連れられ校舎から出ました。

福島県は地震や津波による被害が大きかったです。そして原発による水素爆発で放射線の恐怖もありました。僕はこの経験を忘れず福島県民として誇りをもっていろいろなことに挑戦し、頑張っていきます。

（20文字 × 20行）

「東日本大震災の体験談と復興への願い」応募原稿　氏名　佐藤[illegible]

伊達市立梁川小学校　10歳

ぼくは、小学校一年生の時に大きな体験をしました。一つは、地しんです。大きなゆれでびっくりしました。その時、お父さんに学校に車で向かえに来て帰える車中で地しんを経験したのです。道路が波を打ったようにぐにゃぐにゃとしていたのを思い出します。家へ着くとお母さんがびっくりして外におばあちゃんと一緒に立っていました。その後、余しんもたくさんあって電気も止まり水道もガスも止まりました。一週間位は大変な生活をしたのを覚えています。食べ物もなくお風呂にも入れず本当につらい一週間でした。

二つ目は、原発事故です。六十キロはなれた場所で水素ばく発がまり放射能が飛散して今も苦しい生活をしています。その当時は、夏にマスクを長そで長ズボンを着てガラスバッチを身に付けて登校していました。暑くて暑くて外でも遊べず家に二年間位とじこもっていたのを思いだします。今もガラスバッチを持って学校に通っています。

（20文字×20行）

公務員
福島県いわき建設事務所　44 歳
（東京都派遣）

42

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名　湊　勇人

　衝撃・恐怖を与えた東日本大震災。秋田で生まれ育ち、東京都職員に就職した私は、東北人として行動に移せないかと即座に思った。

　二人の幼児を持つ親として、自分の家庭も守らなければならない。しかし、何もしなければ、将来に渡って悔いが残ってしまうことを妻に伝えた。なぜなら、私は東京都職員となって25年間、伊豆大島、三宅島の噴火や新潟県中越地震の災害復旧事業に携わったにも関わらず、東北の非常事態に何の関わりをもたずにいられなかった。当然、妻は理解してくれたが、子供達の承諾が条件であった。

　当時小学1年の娘に地震、津波、原発事故について模式図を書きながら説明し、福島県派遣を伝え、娘は泣きながら了承してくれた。

　派遣先はいわき建設事務所復旧・復興部となり、2年間の単身赴任生活を送った。

　今でも多くの福島県民の中に、一緒に暮らせない家族もいることを忘れてはならない。

私の家族はずっと福島を応援していく。

（20文字 × 20行）

かくじょう小学校 三年 馬場理奈

わたしたちの国には、せんそうはないけど地しんは多くおこります。せんそうとはちがって、地しんをさけることはできません。

ようち園の年中までは、家がゆれるなんて考えられなかったけど、ある日、とつぜん家がぐらぐらと大きくゆれはじめました。あの日のことは、今になってもわすれる事ができません。わたしの家はマンションなので、とくに大きくゆれて、「もうこのままくずれてしまうのかな。このまま死んでしまうのかな」と、とてもこわい思いをしました。

つなみで流されてしまった人は、「自分はこれからどうなるんだろう、こわいな、死にたくない」とふ安だったと思います。

せんそうは人の気持ちでやめられるけど、地しんは、現実なので仕方がないと思います。わたしが今できる事は、地しんがない国にするのはむずかしいので、みんなで協力して助け合い、一人一人が自分や他の人の命を大切にする事だと思います。

コクヨ ケ-50-G 20×20

24

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 荒井啓明

あの震災があった日、私は友達と自宅にいました。その日は、卒業式で午前中には授課だったため、映画「告白」を見ていました。「告白」は、2010年にオリコンランキング文庫部門で歴代1位となった湊かなえさんの小説を、中島哲也監督が松たか子さんを主演に映画化したものであり、娘を殺された中学校教師が生徒を相手に真相に迫っていくというミステリー映画です。私たちは、ハラハラしながら、その映画にくぎづけになっていました。そんな矢先、突然、部屋が揺れはじめました。最初は、すぐにおさまると思っていましたが、揺れはますます強くなる一方でした。これはただごとじゃないと思い、すぐに外へ出ました。揺れがおさまると、家族や友達、近所の人達のことが心配になってきました。その後も余震や、原発の事故などがあり、不安で寝れない日々が続きました。私はこの体験を一生忘れません。この体験は、永遠に語り継いでいかなければならないと思います。

（20文字 × 20行）

福島県立白河高等学校　18 歳

25　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 内田亜梨沙

私は三月十一日に東日本大震災を経験しました。震災後は、電気やガスや水が止まってしまい、普段の日常生活を過ごすことが出来ませんでした。なかでも、水は長い間止まってしまったので、家族全員で給水所まで水をくみに行ったり、スーパーまで飲み水を買いに行ったり、生活に必要な水を確保するのが大変でした。私はその経験を通してあらためて、水の大切さを実感しました。

現在、福島県では震災の復興活動が進んできてはいますが、原子力発電の問題などがまだ残っているため、今後は一人一人がその問題についてよく考え、話し合いながらよい解決策を見つけていけたら、良いのではと思います。また震災の際は、沢山のボランティアの人々に助けてもらったので、今後どこかで震災が起きたときは、今度は自分が苦しんでいたり、困っている人々を助けていきたいと思います。

（20 文字 × 20 行）

福島県立白河高等学校　18歳

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名　藤田　黎

あの日は中学校の卒業式でした。中学二年生だった私は、今までお世話になった先輩方に感謝し、何事もなく卒業式を終えました。両親が共働きなので、家に帰って一人で昼飯を食べていました。その平穏な日を突然の大きな揺れが襲いました。始めはただの地震かと思っていたのですが次第に大きくなって今まで感じたことのない程の大きさになり反射的に私は外へ逃げ出しました。そこで頭をよぎったのが近くに一人で住んでいる祖母です。足が悪かったため、一人で逃げることはできないだろうと思い、すぐに祖母の所へ向かいました。祖母の家に向かう途中で見た地割れや崩れた家を見て心が痛みました。祖母は近所の人達の助けもあり無傷で逃げ出せていて、本当に安心しました。

私達が経験したことはとても貴重なことです。だからこそあの心の痛みや助け合いの心も忘れずにこれからも生きていかなければならないのです。

(20文字 × 20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名　匿名希望

けたたましく鳴り響くサイレンの音が聞こえてきたのは、地震が起こってそう経ってからのことではない。私は玄関掃除をしていた。揺れによって玄関の床の一部が欠けてしまったからだ。当時は地震の被害に遭ったという事実をすぐには実感できないまま、不安を追い払うかのようにせっせと手を動かしていた。

震災によって私たちが住む福島県は大打撃を受けた。津波で大切な人や家を失ったという人が多くいる。また、震災直後の原発事故による放射能の放出は、農作物に対する風評被害を招いた。県外へと避難する人も増えていき、周りの不安は募っていくばかりだった。

しかし、震災からしばらく経ち落ちついてくると、復興活動に精を出し始めた。他県の人を呼び込むような大きなイベントを開催するなど、私たちは多くのことをやってきた。

だが、問題は全て解決したわけではない。震災をただの「悲劇」として片付けるのではなく、今後も語り継いでいくべきだと思う。

（20文字 × 20行）

福島県立白河高等学校　18 歳

28　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 根本佳澄

三月十一日、私は中学2年生で一つ上の学年の卒業式でした。帰ってきて妹とテレビを見ていました。揺れ始めたときは「あ、地震だ」と思っただけでした。でもしだいに大きく大きくなっていきました。怖くなって外に出てみると飼っていたペットがきゃんきゃん鳴いていました。見てみると、地震で崩れた家のまわりを囲っている塀の下じきになっていました。おじいちゃんが塀をどかすとペットは目をとじて息をしていませんでした。

私と妹はその日一日中泣いていました。心にぽっかり穴があいたようでした。

私のように大切なものを失ってしまった人は今回の震災でたくさんいます。物は壊れてもいつかは元に戻すことはできるけど、命は二度と戻ってはきません。今でも震災関係のことを見たり聞いたりすると心が痛みます。今でもくるしい思いをしている人がいます。早く復興が進み、震災前の福島県になることを心から祈っています。

（20文字 × 20行）

福島県立白河高等学校　18 歳

29．「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 飛澤惇敬

あの日、多くの同級生と鶴舞川デリーナで運動していた。その時あの大地震が起きた。天井が落ちてきた。職員の方の指示で無事に避難することができた。

父は福島、母は郡山で働いていて、兄は郡山の高校に行っていた。友達のお母さんが、とにかくお父さんかお母さんに連絡してごらんと言われ、電話をかけた。何とか父に無事を知らせることができた。母が家に帰ってくるまで友達の家にいさせてもらった。とてもありたがった。安心することができた。

多くの人が犠牲になった大震災だったが、彼の身内や友人、知人はみんな無事だった。彼も怪我なく、あの日を過ごせたのは、親切にしてくれた人達のおかげである。高校を卒業する今を迎えて改めて思うことは、やるべきことを普通にできる大人になることである。これからは、自分が大人になっていくのでもし大きな災害が起きたら自分が率先して、周りの人たちを助けていきたいです。

（20 文字 × 20 行）

10　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名　鈴木悠

東日本大震災当日、私は中学校の卒業式を終え、友達と食事をしていました。地震がきた時、最初はいつもと同じくらいの小さな揺れだろうと考え、特に逃げることも焦ることもなく友達との食事を続けていました。しかし、突然揺れが大きくなり、店内にいた人の携帯電話の地震速報が鳴り響き、店の奥では食器が割れる音がし、店の外を見ると洋服店のマネキンが倒れていました。震災の日から水道やガスが止まり、普通の当たり前の生活ができなくなり、不安に思う毎日を過ごしていましたが、浜通りでは津波や原発の被害もあり、自然災害の恐ろしさを知りました。

福島県内では今も自分が生まれ育った故郷に帰ることができずにいる人がたくさんいます。全ての人が普通の生活を取り戻せる日がくることを願っています。

（20文字 × 20行）

031

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名　匿名希望

今年の3月11日で東日本大震災から4年が過ぎようとしています。私は4年前のあの日、友達とショッピングモールで遊んでいました。すると突然大きな震えがして雑貨店の棚が倒れてきたので、思いで外へ出たことを覚えています。私はその時、何が起きたか分からず困惑していました。その日の夕方、電話がやっとつながったので家族の無事が確認することができました。しかし、テレビのニュースで津波の被害や原発の爆発で放射能が漏れ出していることを知り、これからどうなるのか分からず、とても不安になりました。

時が経つにつれて、家や道路の物理的復興はだいぶ進んできたと思います。しかし、親しい人を失なったり、家にまだ帰れない人々の心理的復興は難かしいものだと思います。

私は将来、看護師を目指していて、大学で心理学も学ぶと思うので、これを生かして、福島に帰ってきた時に被災者の方と関わり少しでも心のケアができればよいと思います。

（20文字 × 20行）

福島県立白河高等学校　18歳

032　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名　生方健登

地震が発生した時、私は中学校の卒業式が終わり、私の家で友達二人と遊んでいました。先輩方の卒業式も終わり、ほっと一息ついていた、その時にあの地震が発生したのです。家の中にいては危険だと思い、外に出てゆれが収まるのを待ちました。家のすぐ近くに在置している小学校では児童を家に帰らせる放送がながれており、なにか協力できることはないかと思った私たちは小学校へ向かい、児童をそれぞれの家まで送り届けました。児童の保護者から感謝され、少しばかり協力することができたかなとその時は思いました。その後、近所の一人暮らしのおばあちゃんの所へ行き、無事かどうか確認し家に帰り、そこで初めてこの震災の規模の大きさをニュースで知りました。夜は余震が続き、不安で家族みんな一緒に寝ました。私の周りの地域では大きな被害はありませんでしたが、人と人とのつながりがとても大きな力になり、大切なものだと認識することができました。

（20文字 × 20行）

福島県立白河高等学校　18歳

033 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名　石井 ひとみ

三月十一日。たくさんのことが変わってしまったあの時間。私はなにが起きているのか理解できなかった。電柱が大きく揺れ、ブロック塀は崩れ落ちた。止まっていた電気が復旧し、テレビで流れたこの一大映像は衝撃的なものだった。原形をとどめられなくなった家屋、人も建物もなにもかもを飲み込んでいく津波。自分が体験したものをはるかに超えた恐怖がそこにはあった。そんな状況で、自分ははにも出来ない無力さに涙が出た。

あれから、もう四年がたとうとしている。この一年からはだんだんと震災の文字は消えつつある。しかし、震災はまだ終わっていない。完全には、以前の生活に戻っていない。そのことを、被災地だけではなく、すべての人に知っていてほしい。

多くのものを失った震災。しかし、震災を通してたくさんの人の繋がりや、日本の団結力、思いやりの心を得ることができたのではないだろうか。

（20文字 × 20行）

034

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 早津響

東日本大震災が起きた後、福島第一原子力発電所の爆破があり、当時中学2年の私は部活動に一生懸命に取り組んでいました。中学3年になり、4月に予定していた修学旅行は9月に変更され、部活動も外での活動は2時間以内というような制限もありました。私は東日本大震災を経験して普通に過ごすということが本当は一番難しくて、ありがたいことなんだと思いました。

現在でも原発の影響で相双地区の人が戻れないという状態が続いています。私はその状態を変えられる方法がわかりません。どうやったら復興の手助けをできるのか、よりよくしていくためにどうしていくべきか、具体的なものがないので、行動しようがないと思ってしまいます。復興をより早く進めるためには具体的な行動を多くの人に呼びかけ、そして、このことを記憶の中にいつまでも残していけるようにしていけば、よりよい将来につながると思っています。

（20文字 × 20行）

福島県立白河高等学校　18歳

035　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 後藤悠貴

当時中学2年生だった私は、先輩方の卒業式を終えて、家に帰り、母と兄と私の3人でテレビを見ていた。いつもと変わらず時間を過ごしていた。その時、突然、小さい波の揺れが起き、大したことのない地震だと思っていた。しかし、次第に揺れの激しさは増し、長い時間揺れ続けた。私の家では、震災の被害は少なく、私自身は震災に対しての意識は低かった。テレビは映らず仕方ないと思い、ラジオをつけると、一瞬にして身体が凍りついた。地震だけでなく津波の影響や原発の爆発で福島県、特に沿海地域は壊滅状態であった。3月の肌寒い季節も敵となった。

翌日、テレビを通して震災の恐怖を知った。地震と津波は多くの人の命を奪った。原発により、風評被害も人々を苦しめた。今まで自然災害とは無縁だと感じていたが、すぐ近くにあった。失ってもいい命などいつもない。地震や津波の対策をしっかりし、1つでも多くの命を救い、今という時間を生きてほしい。

（20文字 × 20行）

福島県立白河高等学校　18歳

036　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 高山 杏理

東日本大震災から、もうすぐ4年が経過しますが、私は今でもあの時の恐ろしさを鮮明に覚えています。私は外出していた際に地震にあいました。建物の窓が割れ、駐車場の車は、もの凄い勢いで揺れていて、目にしている光景が現実のことだとは思えませんでした。その後も続く余震や原発事故により、私は東京に住む姉の家へ避難していました。その時もニュースで福島の状況が放送されるたびに福島に残っている家族のことを心配しながら過ごしていました。今となっては、家族一人も欠けることなく、震災前と変わらない生活ができている私はとても幸せなのだと思います。福島県は前向きに復興しているように思えますが、今でも仮設住宅で生活を送っている人が数多くいます。そのような人たちが少しでも早く元の生活に戻れることを強く願っています。また、原発による被害の大きさを知り、原発に頼ることのないエネルギーの開発が今後の日本の大きな課題だと思いました。

（20文字 × 20行）

037 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名　匿名希望

東日本大震災から三年以上経過した現在、復興に向けて着実に前に進んでいると感じます。しかし、三年前のあの日だったら、そんなことも考えられませんでした。道路は分断され、水道は止まり、余震がいつまでも続くという状況に私は生活する中で体験したことがなく、そしてこれからも経験しないと思っていました。その時はただひたすら不安で、これからどうなってしまうのだろうと考えることしか出来ませんでした。震災前では想像がつかない状況で生活するのはストレスも溜まったけれど、亡くなった人の分まで頑張って生きたいという思いがあったので今日まで生活しています。

私が住む地域では震災前とほぼ変わりのない暮らしが送れるようになったけれど、県内でもまだまだ厳しい状況にある場所もあります。それを全国の皆さんにもっと知ってもらい、より速く、より安全で安心できる福島になることを願っています。

（20文字 × 20行）

福島県立白河高等学校　18 歳

038 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 安田亮平

私は、あの地震があった時文港の家にいました。あの時に起こったことは今でもはっきりと覚えています。みんなで楽しく話していたら、急に揺れてきて最初はすぐに収まると思っていました。しかし、どんどんと揺れが強くなり、恐怖で何をしたらいいかわからなくなっていました。当時　私は中学生で考え方とかまとまってなかったので、どのような行動をすればいいかわからなかったので、家に帰ってからも、家がすごいことになっていたのを今でもはっきり覚えています。

私の家は、ヒビなどが入ったくらいで済みましたが、町の中では、全壊や半壊の家があったと聞いています。家がなくなってしまった人達などの支援をいままで以上にしてくれれば、少しは復興が進んでいくと思います。昔以上の日本を作りあげていくために、東日本大震災の復興に全力で取り組んでいかなければいけないと思うので　これからもがんばっていきたいと思う。

（20 文字 × 20 行）

福島県立白河高等学校　18 歳

039　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 山口智仁

三月十一日。あの日私は、家で録画をしていたはじめの一歩を見ていた。しかも日本タイトルマッチ千堂対嘉納のファイナルラウンドだった。このアニメでも最も興奮する試合でもあったので、私は食い入るようにテレビを見ていた。嘉納が千堂のあのスマッシュをもらい相打ちで千堂もリバーブローをもらった。しかし千堂はあのスマッシュをくりだしたが嘉納はこれを読みよけて必勝パターンがゼルパンチからのリバーブロー。そしてテンプシーロールをくりだそうとするその瞬間ケータイのアラームが鳴った。最初は、気にもとめずに見ていたが、揺れが強く身の危険を感じ家を飛び出した。あたりは変わりはてていた。マンホールが飛び出て瓦が散乱見るに堪えない光景だった。あれから四年あたりを見渡すと雲一つなんら変わりのない光景が広がっている。この瞬間生きている喜び、日本の素晴らしさを感じた。これからの人生その喜びを噛み締めて生きていきたい。

（20文字 × 20行）

040　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名　兼子瑞妙

今までに経験のない大きな揺れの中で、携帯電話の地震速報だけが鳴り響いていたことは、今でも鮮明に覚えています。未曾有の大震災に続いての原発事故。町の職員である母は、避難をしてきた方たちの対応で心身ともに疲れ、私たち家族もまた何日も眠ることのできない不安な日々を過ごしました。

発生からまもなく4年が経過しようとしている現在も、震災の爪痕は大きく、度重なった原発事故のために、県内外の仮設住宅で暮らす方々がたくさんいらっしゃいます。このような現状をすぐに変えることができる力は私にはありませんが、この辛い経験を踏まえた想いや状況を発信することはできます。一刻も早く復興が進み、みんなが幸せに暮らすことのできる福島県になることが一番の願いでありますが、記憶が風化しないように語り受け継いでいくことが、今の私の使命だと考えます。

（20文字 × 20行）

041 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 匿名希望

東日本大震災から4年が経とうとしている。4年が経とうとしている今も、家に帰れない人や家族が行方不明のままの人もいる。そうした状況で生活していくのは、期間が長くなるほど、精神的、身体的に負担が増えていくのではないかと、私自身は感じている。それほど長い期間、家を空けたことがない私だって、自分の家に帰ってきたときは心が落ち着くものだ。「家庭」は人間にとって、憩いの場であるのに、その家に帰れない人が大勢いる。

まずはその人たちが自分たちが元いた家に、安心して暮らせるように、環境を整えるべきだと思う。原発の問題など、実現には多くの壁があることは確かだが、少しずつでも実行にうつせていけたらいいと思う。

（20文字 × 20行）

福島県立白河高等学校　18歳

042　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 岩本直也

現在高校3年である私は、震災発生時は中学2年でした。その日は、中学校の卒業式が行われ、地震発生時の午後は自宅に帰っていたところでした。

家の中には、祖母と妹との3人がいましたが、共に今まで体験したことのなかった強い揺れに全員が家の外へと飛び出しました。家の外へ出ても余震は何度も何度も続きました。

自宅近くの様子を見に行くとコンビニエンスストアでは電気もついていないところや、白河市のシンボルである小峰城の石垣が大きく崩れていたりと悲惨な状況の多くが、今の地震の大きさを物語っていました。

現在でも福島県全体としての問題として原発による風評被害や避難している方々の問題などがあります。こういった大問題のひとつひとつから目を背けることなく、見つめあっていくことで、今後の復興は好転していき、事態の終息へと限りなく近づいていくとそう確信しています。

（20文字 × 20行）

福島県立白河高等学校　18 歳

043　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 小林 翔

3月11日はちょうど先輩たちの卒業式が終わり家で友達と遊んでいました。その時いきなりの大震災です。皆慌てて外に出ました。今まで体験したことのない地震で唖然としていました。揺れは長く続き、その長い揺れの中目の前で家が壊れていきました。壁ははがれ落ち窓ガラスは割れ、家具は次々と倒れていました。いきなりの出来事で頭の整理ができず言葉も出ませんでした。なんとか誰も怪我することはなく、家も大規模半壊でと、さの判断でストーブを消したので火事になることはありませんでした。改築するまでは祖父母の家にお世話になりました。震災を通して良かったことは日本人の助け合いの心です。家の片付けの時は何も言わずに兄の友達が手伝いに来てくれました。また他にもいつでも盗みに入れる状況なのにそういう人はいませんでした。辛いことがたくさんありましたが震災を通して改めて考えさせられるようなこともたくさんありました。

（20文字 × 20行）

福島県立白河高等学校　18歳

044　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 近内恵莉

私は中学二年の時に東日本大震災を経験しました。それまであれほど大きな災害を身近で経験したことがなかったので、私はあの日、改めて自然災害の恐ろしさを思い知りました。

あの大震災からもうすぐ四年の月日がたち、今ではほぼ完全に復興したように見える所も多いですが、細かい所へ目を向けると、私が住んでいる白河市内にも未だに仮設住宅で暮らしている人もおり、まだ完全に復興したとは言えません。

ですが少しずつでも震災以前の状態に戻れつつあります。それが出来ているのは様々な国や地域の人々の助けがあってこそだし、被災地の人々が復興を強く祈り頑張ったからだと思います。

私がこれからも福島県民としてきていく中で、私は被災者だから他の人々に助けてもらって当たり前、という考え方をせず、一度震災を経験したからこそ故郷の復興に向けて人一倍頑張っていきたいです。

（20文字 × 20行）

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名　匿名希望

東日本大震災から4年がたとうとしています。今、現在もニュースでは、東日本大震災関連の事が報道されています。

私は、年末に宮城県気仙沼市と岩手県大船渡市に行く機会があり、被災地を見み行きました。津波の影響を受けたところは、土地のかさ上げがされ、復興の兆しが見え、街も活気があふれていました。

福島県は、原発事故があり、その影響で地元から離れた場所で避難生活を送っている人が今もいます。また、風評被害などの問題を抱えているのが現状です。少しでも早く震災前の生活を実現できるよう、県全体で状況を把握し、情報を共有して復興という大きな目標を達成できればいいと思います。また、これからの福島を担うのは私達高校生だと言うことを忘れず、福島の復興のために、ボランティアを行ったり、政治情勢を学び、様々な場面で貢献できるよう、これからの生活を実のあるものにするべきだと私は思います。

（20文字 × 20行）

福島県立白河高等学校　18 歳

46　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 阿部 拓海

思い起こせば、約4年前、当時中学2年生だった私はあの大震災を経験した。このたった1つの災害でいくつもの災害を引き起こしたのが印象深い。1つは津波である。私が住んでいるところは津波の心配はなかったが海のすぐ近くに住んでいた友人の家ともども津波にのまれてしまった。一番痛ましいのは友人のおばあさんは逃げ遅れ命を落してしまったことだ。私はその友人から話を聞き、命の大切さをさらに強く認識させられた。2つ目は原発である。あの水素爆発が起きたことによって生活に大きな支障を与えた。私の祖父、祖母は農家であり、原発の風評被害を受けた。そのため、わざわざ福島の農家の人達を集め、畑でとれた野菜を持って売りに行き、福島の野菜は安全だということを伝えに行ったそうだ。

私は、福島全体の復興のために風評被害をなくし、農業、または生活を福島県民自ら積極的に生き抜いていくべきだと思う。

（20文字 × 20行）

福島県立白河高等学校　18 歳

47

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 遠藤友香

私は、東日本大震災で大きな被害を受けることはありませんでした。しかし、私の祖母や友達は多くの被害を受けました。

私の祖母の家は、白河で土砂崩れが行った場所の近所に位置し、家が全壊し家の中の物がぐちゃぐちゃになっていました。その時、祖母の家には誰もいなく、助かりました。その後祖母の性格は、口うるさくはなったが、何事も積極的に行うようになりました。この震災で祖母が生まれ変わったように見えます。

次に私の友達は、山でペンションを経営していました。しかし、風評被害で運営が厳しくなり、滋賀県に引っこしました。今年で4年経ち、再び運営することができました。しかし、常にこれからがんばると前よりも頑張っています。

私のあの災震で、少し積んでいた自分、周りの人、そして日本が変わりました。あの災震は忘れることはできないが、少しずつ良い方向に変わる契機を作ってくれたと思います。

（20文字 × 20行）

福島県立白河高等学校　18 歳

4K　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 藤田叶子

未曾有の大震災から約4年がたとうとしています。当時の私はまだ中学生で、状況を理解することに精一杯でしたが、数年がたち、様々な面から大震災を振り返る機会が増えました。私が一番心に残っている言葉があります。それはテレビで目にした"悲しみを共有できたか"という言葉です。日本、または世界の人々に悲しみを共有してもらうことだけが目的ではありません。しかし、被災地以外の方々の中には大震災の被害等について知らない方が多いと思いました。福島に住んでいるからといって宮城の方の悲しみを共有できるかと言われると、やはり全ては共有しきれないことも事実だと思います。しかし、私は共有しようとする姿勢に意味があると思いますし、被災地に住んでいる私達は、状況や正確な情報を伝える義務があると思います。これから生きていくなかで、自分と関係のないと決めつけず、自分の体験を元に、どんな形でも手を差し伸べられる人でありたいです。

（20文字 × 20行）

49　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 入野貴仁

平成23年3月11日午後2時46分に東日本大震災が起こりました。私は中学校の卒業式を終え、友達の家で遊んでいる時でした。最初はゆっくりと揺れているだけだったので、友達と大丈夫だろうと言ってあまり気にしていませんでした。しかし、だんだんとても強い揺れになってきて、友達のお母さんが外出るよと言って息を切らして私達のところへ来ました。私達は焦って外に出ると、電線が切れようなくらい激しく動き、道路が割れるなど現実で起きていることなのかと目を疑いました。

私の体験は、命に関わることはなく、生活が不自由になるということだけでした。しかし、他の地域では、津波により多くの犠牲者が出ました。そのことを考えると、まだ私達は幸せだったのではないかと思います。震災の傷跡は今でも残っています。完全に消えることはないかもしれません。だから少しでも回復できるように自分も協力していきます。

（20文字 × 20行）

50　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 石川瞳子

私の住んでいる地域は、津波の影響は無く、福島第一原子力発電所からも離れているので、福島県内では震災による被害が比較的軽い方だと思います。でも、同じ福島県でもっと辛い目に遭った方々のことを考えるととても辛くなります。私は所属している剣道部では、一昨年から福島県の復興を祈念した、剣道の大会を開催しています。北は青森県から南は長崎県まで、全国各地から選手たちが福島県に集まってきます。少しでも福島県が活気づくようにと願いを込めて始められたものです。毎回沢山の選手が参加してくれるので、とても良い大会だと思っています。震災以降、福島県へ足を運ぶ人が激減していますが、この大会をきっかけに、福島県への興味や感心をもつ人が少しでも増え、福島県が震災以前よりももっと活気づいてくれると良いと思います。福島県の一日でも早い復興を心から祈っています。

（20文字 × 20行）